

# 呼吸器センターがオープン

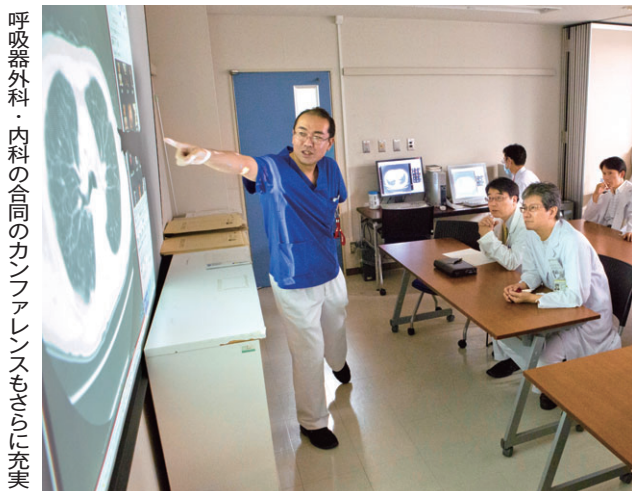
## 外科・内科の連携 同じ病棟で一層密に

肺など呼吸器の病気を呼吸器外科と呼吸器内科が連携して診療する呼吸器センターが、このほど東7階病棟にオープンしました。これまでは内科と外科が別々の病棟で診療していたため、入院患者さんの診療が円滑にいかないこともありましたが、病棟を共有した結果、無駄が省かれ、内科と外科の両診療科の連携が強化され、より質の高い医療を提供することができるようになりました。

呼吸器センターで診療する病気は、肺炎、間質性肺炎、肺気腫、肺がんなどの肺疾患をはじめ、阪大が得意とする胸腺腫瘍、縦隔腫瘍、重症筋無力症など多岐にわたります。治療としては薬物療法や肺切除手術などの一般的な治療から、肺移植のような先進医療まで行われています。肺がんなどの悪性腫瘍に対する化学療法(抗がん剤治療)は主として呼吸器内科の担当になりますが、手術治療を併用する患者さんの場合には、呼吸器外科も参加して患者さんの状態をリアルタイムに把握して治療にあたるのが容易になりました。



オープンした呼吸器センター



呼吸器外科・内科の合同カンファレンスもさらに充実

外科治療を担当するのは呼吸器外科医ですが、手術リスクの評価や対応、術後の肺炎などの合併症の治療には呼吸器内科医の支援が欠かせません。さらに、肺移植を待つ患者さんについては呼吸器内科での在院療法や薬物療法が行われており、呼吸器外科も状況把握して共同で移植に備えています。検査においても、これまで診療科が変わると一旦、外来の事務手続きを通す必要がありました。センター化に伴い同一病棟で連携できるようになりました。その結果、胸腔鏡による生検や気管支鏡検査などで機動性が大きく向上しました。また、センター発足前から行っていた呼吸器内科と呼吸器外科の両科合同カンファレンスも引き続き毎週1回、開催されています。現在、呼吸器センターの診療に関連する他の診療科、たとえば放射線診断科の胸部グループ、放射線治療科等のスタッフも検討会に参加しており、内科治療・外科治療・放射線

治療の集学的治療に関して、質の高い議論が行われています。奥村明之進センター長は「センターができたことにより、外科と内科の医師が検査結果

などの患者情報だけでなく、実際の状態もベッドサイドで共同で把握することが容易になり、意思疎通も迅速になっていきます。阪大病院の呼吸器診療は、これまで以上に高度な医療をより適切に行えるようになり、診療の質も向上していくでしょう」と、呼吸器センターのこれからを期待を寄せています。

# 内視鏡センターの改修完了

## 広さ 1.7 倍、リカバリーベッドも設置

内視鏡による検査や治療の需要増加に対応するため行っていた内視鏡センターの改修工事が、このほど完了しました。これまでの約1.7倍の広さとなったベッド数が増え、リカバリーベッドも新設されました。最新型の内視鏡を導入するとともに院内で使用する内視鏡を一括管理し、検査、治療をより安全に行えるようになりました。

内視鏡センターでは昨年度、胃、食道など上部消化管4365件、大腸などの下部消化管1315件、小腸94件、カプセル内視鏡40件の検査を行いました。センターが手狭なため、ここ2、3年増え続けている各診療科からの検査要求に十分に応えることはできませんでした。さらに初期の胃がん、食道がんや大腸がんの内視鏡



検査、治療をより安全に充実して行えるようになった



新設された鎮静スペース

治療については件数が増加しているため、患者さんの待ち時間が長びく状態が続いていました。今回の改修により、面積が150平方メートルから250平方メートルに拡大し、ベッドも2床増え

て6床になりました。また、鎮静スペースの新設に伴い、リカバリーベッドが3床設置され、術前検査の麻酔が覚めるまで患者さんが安静にするスペースを確保できたことにより、外来での内視鏡検査が可能になりました。

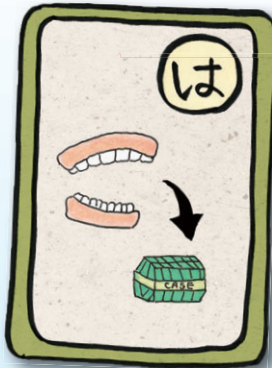
将来的には胃がんや大腸がんの内視鏡手術を、センターで日帰りで行う構想もあります。土岐祐一郎センター長は「内視鏡による検査や治療は、これからますます増えていくことが予想されます。また、内視鏡がさらに進化することにより、診療における内視鏡の重要性が増すことも考えられます。本センターはそれらに答えられるよう、充実・強化していきます」と話しています。



患者さんと医療者のパートナーシップ

## みんなのここにこ いろはうた

全4回シリーズ  
~第2弾!~



②:歯は外したらいれ物へ  
大事な体の一部です

入れ歯をなくしてしまうと、とても不便です。検査などで外した時は、すぐに容器にしまいましょう。

次回、第48号では「に(自己決定)」「ほ(信頼できる人への相談)」の句を紹介します!



③:廊下は意外にすべります  
スリッパやめて夜も安心

スリッパは、院内ではすべりやすく、ケガのもとになります。入院中は履き慣れた、すべりにくい、踵(かかと)をおおう靴で過ごしましょう。

### 七夕コンサートにうっとり



7月6日に恒例の七夕コンサートが開催されました。第一部は堀井教授(微生物病研究所)のフルートと吉場研究員(生命機能研究科)のピアノによるデュエットで、患者さんはうっとり聞き入っておられました。

第二部の梅花女子大学チアリーディング部によるアクロバティックな演技には、場内から大きな拍手が起きました。終了後には、患者さんから「良かったよ」「元気をもらった」と感動の声を寄せていただきました。

### 阪大病院を見学してみませんか

阪大病院では、大学病院について広く皆様を知っていただくために、「病院見学会」を実施いたします。普段は接することのできない場所を見学いただくとともに、最先端の医療に触れるチャンスです。ぜひお気軽にご参加ください。

- 実施日時 9月28日(金)午後2時～午後4時30分
- 募集期限 9月10日(月)必着
- 対象者 一般市民(成人、個人)
- 募集人員 15名
- 申込方法 はがき、ファックス、電子メールにより、氏名、性別、年齢、郵便番号、住所、電話番号を明記のうえ下記へ送付(個人情報、本件以外の目的には使用いたしません。)
- 送付・問い合わせ先 〒565-0871 吹田市山田丘2-15 大阪大学医学部附属病院総務課広報評価係 TEL 06(6879)5020,5021 FAX 06(6879)5019
- E-mail ibyou-soumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp
- 決定通知 応募者多数の場合は抽選により決定し、参加の可否をはがきでお知らせします。
- 見学場所 ドクターヘリ、未来医療センター、内視鏡センター、薬剤部など。(※都合により、見学場所が変更になる場合があります。)

### サブウェイがオープン



サンドイッチの「サブウェイ 阪大病院店」が6月9日、1階一般食堂東側にオープンしました。健康志向、本物志向の食生活のニーズに応えるため、「新鮮でヘルシーで体にやさしい」をコンセプトとして、たっぷりの新鮮野菜と店内で焼き上げたパンを使い、お好みのサンドイッチを目の前でお作りします。

- 営業時間 平日 午前8時～午後6時 土日・休日 午前10時～午後6時

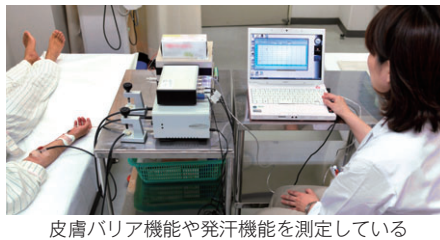
### 糖尿病治療患者の交流の場

大阪大学あけぼの会は、本院の内分泌・代謝内科、老年・高血圧内科で糖尿病治療を受けておられる患者さんの会(会員約120人、うち役員約10人)です。患者さん同士で交流し、医師、看護師、栄養士などの医療関係者とのコミュニケーションを図り、糖尿病の在宅治療に役立つ最新情報を共有するための会誌「あけぼの」の発行をしています。

年1回の総会や生活習慣病に関する講演会のほか、メタボレスメニューを楽しんでいただく阪大病院スカイレストランでの食事会なども開催しています。

## ホスピタルミニニュース

皮膚は体内の状態を映す鏡と言われ、多様な病気を見つづける窓でもあります。阪大病院の皮膚科は、皮膚のエキスパートとして皮膚の多彩な症状から病気の背景を探り、最適・最新・最良の医療を提供することで、患者さんの皮膚を健康に保ち、QOL向上のお



皮膚バリア機能や発汗機能を測定している

当科では特に難病に関する専門外来を設置しており、一般の診療所や市中病院では治りにくい病気に対して先端的な治療を行ったり、新たな診断法や治療法を開発するなど、質の高い医療を提供しています。乾癬やアトピー性皮膚炎は、発症の原因が

複雑でよく解明されていないこともあり、治療をしても皮膚がよくなるにいたらないことがあります。本院は、難治性の乾癬やアトピー性皮膚炎について、悪化原因を探り、悪化原因を探索して包括的な治療を行う拠点病院であり、症状が落ち着けば、地域の関連病院で治療を継続する連携体制を取っています。アトピー性皮膚炎では、悪化因子として発汗機能異常の関与が注目されており、当科ではアトピー性皮膚炎の患者さんの発汗機能を検査し、生活指導や治療に役立てています。また、発汗だけでなく皮膚表面の角質の保水や蒸散機能も測定して、皮膚の悪化要因とみられる皮膚の乾燥程度を診ることも治療に役立っています。

保健医療福祉ネットワーク部は、1996年度に地域医療機関との連携強化、患者サービスをより充実するために地域医療推進室として発足しました。2001年度に改組され、今年度から「専門看護外来」を看護部に移し、「コンサルテーション部門」「心のケアチーム」「褥瘡対策チーム」の体制となりまし

た。質の高い医療と患者さんのQOLの向上をモットーに、円滑で効率的な病診連携及び病病連携を目指しています。以下に活動内容を紹介します。

①コンサルテーション部門  
初診予約・セカンドオピニオン外来予約  
地域の医療機関からの紹介患者さんについて

②心のケアチーム  
在宅療養環境の設定や転院調整が必要な患者さんやご家族に対し、看護師、MSW(医療ソーシャルワーカー)を中心に病状やニーズ

③褥瘡対策チーム  
入院患者さんを対象に週1回、皮膚科医師2名、薬剤師1名、栄養士2名、看護師1名のメンバーで回診を行い、褥瘡の治療と予防に積極的に取り組んでいます。

さまざまな薬剤の副作用によって皮膚がでる薬疹は、重症になると死に至ることもあります。当科では病気の状態を把握できる検査方法を開発し、重症

の患者さんの診断、治療の効果を上げつつあり、結節性硬化症などの遺伝性の疾患についても遺伝子レベルでの原因解明や悪化因子の探索などを行い、有効な薬物療法などを開発しています。また、皮膚がんにつ

いては、後天的に皮膚の色が抜けて白斑になり、原因不明の尋常性白斑には、紫外線照射による新しい治療に取り組んでいます。また、高度救命救急センター等にMSWを重点的に配置し、円滑な退院調整に努めた結果、患者さんの入院日数を短くすることに繋がりました。今後、逆紹介に関する業務や外来患者さんに対するサポート体制の充実を図り、国がすすめる在宅医療の推進に対応できる人員配置やシステムを作る予定です。

さらに、後天的に皮膚の色が抜けて白斑になり、原因不明の尋常性白斑には、紫外線照射による新しい治療に取り組んでいます。また、高度救命救急センター等にMSWを重点的に配置し、円滑な退院調整に努めた結果、患者さんの入院日数を短くすることに繋がりました。今後、逆紹介に関する業務や外来患者さんに対するサポート体制の充実を図り、国がすすめる在宅医療の推進に対応できる人員配置やシステムを作る予定です。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

移植医療、がん・遺伝子医療などの高度で先進的な医療を行ううえで、患者さんやご家族、医療従事者に不可欠な心のケアのために2005年10月に発足しました。臨床心理士を中心に、医師、看護師、MSW、移植コーディネーター、保健学

入院患者さんを対象に週1回、皮膚科医師2名、薬剤師1名、栄養士2名、看護師1名のメンバーで回診を行い、褥瘡の治療と予防に積極的に取り組んでいます。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

### 円滑な病診・病病連携を目指し

#### 保健医療福祉ネットワーク部



保健医療福祉ネットワーク部のキャラクター

さらには、後天的に皮膚の色が抜けて白斑になり、原因不明の尋常性白斑には、紫外線照射による新しい治療に取り組んでいます。また、高度救命救急センター等にMSWを重点的に配置し、円滑な退院調整に努めた結果、患者さんの入院日数を短くすることに繋がりました。今後、逆紹介に関する業務や外来患者さんに対するサポート体制の充実を図り、国がすすめる在宅医療の推進に対応できる人員配置やシステムを作る予定です。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

科教員ら多職種のメンバーにより構成されています。高度先進医療を円滑に進めるにあたり、本チームによる心理的援助の必要性がますます高まっています。これまでの活動記録の分析・検討を通じて、心理的サポートの質の向上を目指します。

疼痛医学寄附講座は2007年に設置され、主に阪大病院の疼痛医療センターにおける痛みの治療に携わっています。痛みの原因が明らかであれば治療方針を立てやすいのですが、いくつかの医療機関を受診しても原因がわからない患者さんの場合は、単一の診療科だけで診るのではなく、多くの診療科が携わることで病態が明らかとなり、よりよい治療方針を立てられることがあります。疼痛医療センターでは、一人の患者さんをいろいろな観点から診察した上で専門医が意見交換を行うシステムが整っており、患者さんにとって一番良い治療法を見出し、良い結果につなげて

### 疼痛医学寄附講座 痛みの原因を複数科で究明

また本センターでは、体の悪いところを検査で探すだけではなく、痛みが長引く原因を総合的に見極める仕事もしています。痛みが何年も続いているような場合には、身体的な原因だけではなく心理的な問題が悪影響を及ぼしている、今まで受けていた治療の方針が誤っていたりということもあります。痛みの原因は患者さんによって異なるため、その原因を見極めることはとても重要です。もちろん、最先端の医療技術を駆使した痛みの治療にも積極的に取り組んでいます。三叉神経痛に対する熱凝固療法など難治性の神経痛への特殊な治療は、日本でも屈指の症例数を誇ります。麻薬性の鎮痛薬でも抑えきれないがん等の痛みには、特殊な神経ブロックを行っています。本院の疼痛医療センターは、厚生労働省の「痛みセンター設立協議会」の一つに認定されており、疼痛医学寄附講座は、「いろいろな専門家が協力して痛みを取る」との理念に基づいて、センターの活動を支援しています。

その原因を見極めることはとても重要です。もちろん、最先端の医療技術を駆使した痛みの治療にも積極的に取り組んでいます。三叉神経痛に対する熱凝固療法など難治性の神経痛への特殊な治療は、日本でも屈指の症例数を誇ります。麻薬性の鎮痛薬でも抑えきれないがん等の痛みには、特殊な神経ブロックを行っています。本院の疼痛医療センターは、厚生労働省の「痛みセンター設立協議会」の一つに認定されており、疼痛医学寄附講座は、「いろいろな専門家が協力して痛みを取る」との理念に基づいて、センターの活動を支援しています。

新任部長ごあいさつ

●病理部長 森井 英一 (もりい えいち)

病理部は、摘出された手術標本や生検標本により、組織診断や細胞診断を行う中央診療施設です。一刻も早い治療方針の決定に役立つよう、できるだけ迅速で的確な診断を目標としています。部内での活発なディスカッションや診療科の壁を越えたカンファレンスにより、役立つ診断に積極的に取り組みます。また、全国的に不足している病理医を育成できる体制を整えるよう、全員が一丸となって努力していきたいと思ひます。

(平成24年5月1日就任)